

あとがき

『仏語仏文学研究』は、本来は助手・院生が執筆・編集の主体であるが、この第6号「菅野昭正先生退官記念特集号」ではそこに卒業生のOB・OGが乗り込んだ形になった。これも第5号「二宮敬先生退官記念特集号」以来二度目のことである。当初はOBが参加することで研究室紀要論文集にありがちな〈たこつば〉的性格を多少なりとも打破し、院生たちへのモラル・サポートになればと考えたのだが、どうやら期待するほどのこともない財政的・精神的サポートよりは、良い意味でのライヴァル意識が芽生えてきたようである。近年ますます繁忙きわまりない教師生活の傍ら締切に追われて書いた論文と、二年三年の博士課程あるいは留学生活で蓄積した研究成果の発表とでは、さまざまな意味での慣れは別にすると、さてどちらがより刺激的か、読者の判断にゆだねるほかはない。勉強不足を叱咤されるのはむしろ先輩たちの方ではないかと自戒の念を込めて思う次第である。

さて、この特集号ではもう一方のライヴァル意識が働いていることも見過ごすわけにはゆかない。いや、むしろそれが本号全編をまとめる基調ともなっている。それはいうまでもなく学恩を受けた菅野先生に対してである。退官記念号につきものの先生の業績を称え、思い出を記す文章はここにはない。しかし、マラルメ、ブルースト、ヴァレリー、等々、論ずる主題が異なるとはいえ、行間には各執筆者の先生へのメッセージが託されていることと思う。マラルメを論じながらも菅野先生と対峙しあるいは対話しているのである。菅野先生の教えを受けた卒業生で19・20世紀文学を専門とする者は数多くおり、すべての人の論文集を一冊の本にまとめることはとうていできないことである。本号の執筆者としては退官記念パーティの際に募集に自発的に応じてくれた人に限らざるをえなかった。しかし、今後とも各人の研究の中に先生の教えが活かされ、先生との対話がつけられることと信じている。

退官後もさらにご活躍の幅を広げられている先生からライヴァルとは不遜なりとお叱りを受ければ幸いである。

先生の益々のご健勝を祈念しつつ。

田村 毅
(1991.3.17.)

追記。 編集の実際の任に当たられた小倉和子・有田英也両助手に執筆者一同を代表してお礼を申し上げる。しかし、お二人の在職中に刊行が間に合いそうもなく、後任の増田真・星埜守之両君のお世話にもなりそうな気配である。あらかじめお礼を申し上げておく。